

## 第 14 回例会報告要旨

Y Brasluniau o'r Papurau, y Pedwerydd ar Ddeg,

Rhagfyr yr degfed, 2011

Iki-iki Aging Centre, Osaka, Siapan

第 1 部： 個別報告 Rhan 1: Papur

帰郷する詩人—ディラン・トマスはなぜウェールズに帰ったのか—

太田直也

Dylan Thomas's Return Journeys to Wales

Naoya Ota

**Abstract:** Dylan Thomas spent most of his life in the southern part of Wales. After finding fame as a poet in London, he lived there sporadically, but consistently returned to southern Wales and chose Laughern as his final place of residence. Three reasons are attributed to this fact: poverty, nostalgia for his home, and creative inspiration, the latter being dominant. Finding that nothing significant was born of his bohemian days in London and other places in England, he returned to look for his poetic voice through reminiscence of his childhood, turning inward for poetic inspiration: he needed to return to Wales to write *his* poems.

ディラン・トマスの転居歴から判ることは、彼が日常生活のほぼすべてをブリテン島の南側で送ったということ、特に 1938 年の夏以降は、一時的にイングランドに疎開していたことを除けば、常にウェールズに居を構えていたことである。疑問に思われるのは——当時の恋人パメラ・ハンスフォード・ジョンソンに会うためだけではなく——詩人としての名声を求めてロンドンに出たトマスが、なぜ頻繁に帰郷を繰り返し、幾度も転居を繰り返す間にもロンドンに戻ることはなく、最終的にウェールズに住み着いたのかということである。

トマスがウェールズへと帰り続けた理由は、伝記、書簡、作品から推測せざるを得ないが、次の 3 点に集約することができるであろう。すなわち、1) 経済的困窮、2) 故郷への想い、3) 創作である。以下、各々について見てゆく。

\*

トマスの書簡集に収録されている手紙の多くは経済的窮状を訴え、援助を求めるものである。彼は生涯を通じて貧困と闘っていたとも言えるであろう。彼

には援助の手を差し伸べてくれる友人、文学界の著名人、文学愛好家、篤志家などがいたし、何よりも彼自身が他者を惹きつける才能を持っていた。にもかかわらず貧しかったのは、定職を持たなかったからである。これは勿論、詩人として生きてゆくことだけを望んでいた若いトマスが定職につくことを望んでいなかったせいでもあるが、大戦が激化する当時、兵役を免れることのできる職が極めて少なかったせいでもある。また、ラジオや記録映画、あるいは朗読会などの仕事で得た金銭の大半を費やしてしまうほどの飲酒癖のせいでもある。例えば、アメリカ全土で詩の朗読会を開催し多額の講演料を手にしていながら、ラーンの自宅に帰った時には彼の手元にはほとんど何も残っていなかったといわれている。友人たちへの書簡中ではベッドが差し押さえになる、息子の授業料や妻の病気などを理由に借金を願い出ており、出版社に対しては執筆前の原稿料の前払いを繰り返し要求している。

そのような経済状態にあったため、トマスは親戚や知人を頼って転居を繰り返すことになり、必然的にウェールズに住むことが多くなったのである。しかし、自らの意思で転居する時に彼がウェールズを選択したのはなぜなのであろう。特に生涯最後の転居の時、彼は必ずしもラーンに住む必要はなかったのである——購入者マーガレット・テイラーにとっての購入資金、トマスの日常的支出も考慮したにしても。この事実から、トマスはウェールズに対して特別な想い、こだわりを持っていたと考えることができる。つまり、彼が頻繁にウェールズに戻ったのは、単に経済的な理由だけによるものではなかったのである。

\*

一般的な人間の自然な感情としての故郷への想いがトマスにあったのであろうか。転居を繰り返しながら、常にウェールズに住み続けているのであるから、「それなりの」想いはあったと考えるべきであろう。トマスは伝記的エッセーの中で‘I was born in a large Welsh town at the beginning of the Great War – an ugly, lovely town (or so it was and is to me) …….’<sup>1</sup>と記している。この記述における故郷の町に対するトマスの感情は、一見アンビヴァレントなものに見える。しかし、彼は美しいゆえにとも好きだとも、醜いともゆえに嫌いだとも述べていない。トマスの諸作品において対立する事物・要素の共時性が頻繁に歌われていという事実を想起するならば、ちょうど人間がそうであるように、町も美醜が共存してこそ存在する意味があると彼が考えていたと言うことは可能であろう。書簡の中でトマスはウェールズが何もない田舎であり、そこで生を受け生活している自分は田舎者だと自らを卑

下するような調子で記すこともあった。しかし、それは、経済的援助を求める場合であり、実はウェールズの詩人たちを賞賛するエッセーを書いて、故郷の文化を誇りとしている。また、彼自身の散文作品の多くはウェールズを舞台にしているが、例えば“A Visit to Grandpa”においては、人間にとっての故郷の意味・重要性というものを、ウェールズを舞台に語っている。執拗なまでに故郷にこだわる「おじいちゃん」は、トマス自身の姿でもあるのだろう。

トマスがウェールズに特別な想いを抱いていたことは疑う余地もないと思われるが、文筆家として生きてゆくにはロンドンに居を構える方が便利であったのではないかとの疑問は残る。結局、トマスのウェールズへの思い入れの最大の原因は、彼の創作活動や作品のテーマに求めねばならない。

\*

トマスは1934年にロンドンでボヘミア生活を送ったが、そこからは自らが納得するような作品は生まれなかった。<sup>2</sup> つまり、詩人として身を立てるために、彼はロンドンを脱出する必要があったのである。その脱出先がウェールズである必要性は「公園のせむし」と「十月の詩」に見ることができる。

「公園のせむし」の冒頭でトマスは‘The hunchback in the park / A solitary mister / Propped between trees and water / From the opening of the garden lock / That lets the trees and water enter / Until the Sunday sombre bell at dark’<sup>3</sup>と歌っている。この公園を現実の公園として読んだ場合、これらの詩行は奇異なものとなる。木々や水は公園が作られたときからそこに「ある」ものであり、公園の門が開く時にはそれらを「入れる」必要などないからである。従って、ここで明らかになるのは、この公園の存在が来園者の意識や視覚に依存しているということである。すなわち、この公園は来園者が見ているときにだけ存在するものなのである。では来園者とは誰であって、その者たちはトマスといかなる関係にあるのか。作品の中心的人物「せむし」は特異な人物である。彼に関して最初に注目すべきは、彼が詩人を想起させるという点であろう。彼は「新聞からパンを食べる」<sup>4</sup>とされているが、ここで「新聞紙」は複数の意味を有している。「新聞紙からパンを食べる」とは、当然、パンを新聞紙に包んで食べるということであるが、新聞には様々な記事が掲載されており、その記事は文字を用い記されているゆえ、同時に、彼が言葉を摂取していること、彼の生が言葉に依存していることをも意味している。人間は言葉を用いて、つまり言葉と共に生きているのであるが、「せむし」と言葉との関係はその密接さが強調されており、彼を通して詩人の姿が歌われていると読むことも可能となる。

少年たちからかわれている時の彼の行動により、それは一層強調される。少年たちが嘲ると、彼は新聞紙を振るう。<sup>5</sup> 彼は言葉や体が不自由で、罵声に言葉を返し、子供たちを追いかけることや逃げるができないのかもしれないが、新聞を振る必要はない。黙して子供たちを無視することも可能だからである。彼の行動によって示されているのは、彼にとっての唯一の武器が言葉であること、子供たちに応戦するためには、彼は記された文字による攻撃を加えるかのように新聞を振るしかないということなのである。いかなるものに対しても言葉をもって応える詩人の姿がここには見られる。いずれも言葉によってのみ生を維持することのできる、また言葉によってのみ自らの存在を示すことができる者だからである。

詩の中ではさらに、‘ [The hunchback] Slept at night in a dog kennel / But nobody chained him up.’<sup>6</sup> とされ、「せむし」＝詩人以上のことが示されている。「せむし」は「鎖つきの」コップで水を飲むのであるが、彼自身は「鎖でつながれ」ていない。これは。現実の世界に肉体を縛られていながらも、想像力によってその魂を自由に飛翔させることができる詩人としての性質を示しているのかもしれない。しかし、彼が「犬小屋で眠る」とされているところからは初歩的なアナグラム——dog→god——が意識されていることも明らかであろう。詩の後半部では「非の打ち所のない女」を「せむし」は夢想させるにあたって、トマスは「造った」という語を用いているが、<sup>7</sup> これは「せむし」の行為が単なる夢想ではなく、創造であることを指している。彼は——詩人のように——作り手であり創造者なのである。当然のことながら、この作品においては「創造者」から想起されるのは詩人だけではない。「せむし」にはアダムからイヴを創造した神も重ねあわされているのである。さらに「せむし」から「非の打ち所のない女」が創られることから、「せむし」＝アダムと言うこともできるだろう。

以上を念頭に置くと、既に見た作品冒頭の「木々と水の間でつかい棒のようにじっとしていた」（木々の間に支えられて、もたせかけられて、と直訳することが可能）、と歌うに際して、トマスが十字架上のキリストを意識していることも判る。「せむし」が子供たちに対して新聞紙を振る姿は、彼が言葉を「振り飛ばして」道を説いているとも受け取れるが、それは説教をするキリストに通ずるであろう。「せむし」の孤独、疎外はキリストに繋がるのである。かくして「せむし」は詩人、神、アダム、キリストとの極めて強い類似性を持つものとするところができる。

「せむし」の性質が明らかになると、作品の舞台である公園がいかなるものが一層明瞭になる。創造者「せむし」なくしてこの公園は存在しないのであ

る。彼はアダムのように公園の最初の人間となり、キリストのように言葉によって他者を導こうとする。また、彼は詩人トマスでもある。したがって、この公園はトマスの内的世界そのものであると考えることができるのである。

作品の中で歌われている「せむし」以外の重要な人間、「僕」「町から来たズル休みの少年たち」が何者であるのかに関しては極めて明快であろう。<sup>8</sup> この詩はトマス自身の少年時代の回想に基づく作品で、彼自身が作品の背景としてクムドンキン公園にいたせむしと、それをからかった自分たちのことを語っているので、少なくとも表面上は、「僕」はトマス、「少年たち」はかつての友人たちを指しているということになる。

注目すべきは、「せむし」を嘲る一方で、少年たちが彼の後について犬小屋に向かっていることであろう。‘*And the wild boys innocent as strawberries / Had followed the hunchback / To his kennel in the dark.*’<sup>9</sup> は文字通りに解せば、少年たちが「せむし」の犬小屋に向かってゆくのは、夕暮れに各々が公園を後にして帰宅したということなのかもしれない。しかし、少年たちが家ではなく犬小屋に向かったのはなぜなのか。「暗闇」、「犬」、あるいはキリストから想像されるのは死である。つまり、それぞれが死の世界に向かっていったということなのである。そうであるならば、ここでトマスが語っているのは、来園者の視線（意識）によって成り立つこの公園は、「せむし」「僕」「少年たち」が立ち去ることにより、存在しないものとなるのであるが、それを公園側から見ると来園者たちが存在しなくなる（＝死ぬ）ということになる。ただ、そのような公園側からの視点を考えない場合にも、これらの詩行には「せむし」や「少年たち」が死に至るまでの時間の経過が内包されていると言える。従って、もうひとつの読みが可能になる。「苺のように無邪気」であった「少年たち」、とりわけ「僕」が、時の経過と共に「せむし」（異形の大人）になって、死に向かっていったということである。このように読むと、「僕」とされているトマスは「せむし」と重なり合う。「僕」は過去のトマス、「せむし」は未来のトマスとなるのである。この公園は少年時代と老年時代、現実と空想、美と醜が共時的に存在する空間であるということができるであろう。

以上のように、この作品が提示しているのは過去のトマスと未来のトマスの姿であると読むことも可能なのであるが、もちろん、両者を見つめ詩を書いている現在のトマスも当然存在する。つまり、この作品には三人のトマスがいるのである。では、この三人のトマスが1つの公園に共存する（あるいは1つの公園を存在させる）ことは何を意味しているのだろうか。この公園は時間を越えた彼自身の神話の舞台となっているのである。この公園は、トマスにとって自らが発生し、活動し、死に向かい、また戻ってくる場所、始原の場所であり

永遠の場所でもある。トマスにとっての始まりの場所、それはスウォンジーに他ならない。スウォンジーが自らと自らの作品の源泉であり、必要不可欠なものとなっているということを彼は認識していたのである。

では、この作品で歌われているスウォンジーへの想いは、ウェールズへの想いとどう関わっているのでしょうか。重要なのは幼年・少年時代——始原の場所とすることもできよう——の持つ神聖さへの憧れとその回復へのトマスの想いである。かくして、スウォンジーへの想いはそのままウェールズへの想いと拡がってゆく。想いの向かう先は必ずしもスウォンジーである必要はないのである。「十月の詩」は少年期の神聖さとその回復の必要性をより明瞭にうたっている作品であるが、そこでトマスは‘High tide and the heron dived when I took the road / Over the border / And the gates / Of the town closed as the town awoke’<sup>10</sup> と歌っているが、これは単なる情景描写ではない。表向きの意味は「わたし」が「境界」を越えた時、町が目覚めて（町の人々はその日の活動を始めて）静寂に対して門を閉ざしたということである。町が寝静まっている間に彼の意識に入り込んでいた想像（もしくは空想）が消された時に彼は「境界」を越えていたのだが、この動作は彼の心的な動きと連動している。つまり、彼の意識は現実（日々の生活、現在）を離れて空想（かつての日々、過去）に向かっているのである。既に「公園のせむし」にも示されていたが、トマスにとって少年時代は詩魂の源泉であった。それがゆえに彼はそこに戻らねばならないのである。肉体は老いるし、時間を逆行させることはできないゆえに、精神的に無垢な過去戻ってゆくのである。しかし、精神も完全に子どもに戻ることはできないため、可能な限り幼年時代を回想し、そこに近づこうとするのである。彼の回想をみると大人の意識を維持しつつ子どもの心も取り戻そうとしていることが読み取れる。彼が越える「境界」は、現在と過去、現実と空想、大人と子どもとの「境界」であるが、ロンドンでは詩を欠けなかったという伝記的事実を考え合わせると、イングランドとウェールズとの「境界」ということも意識されているのかもしれない。いずれにしても、彼にとって詩魂の再生、詩の創造、幼年期は切り離せない関係にある。したがって、彼がウェールズに戻る最大の理由は、詩人として、新しい作品を創造するための詩心を再生するためであったと言っても過言ではない。

#### 注

1. Dylan Thomas, “Reminiscences of Childhood”, p.3.
2. Cf. Dylan Thomas, “Letter to A. E. Trick, December, 1934”, *The Collected Letters of Dylan Thomas* ed. Paul Ferris (New York:

Macmillan, 1985), p.177.

3. Dylan Thomas, “The Hunchback in the Park”, *The Collected Poems of Dylan Thomas* ed. Walford Davies and Ralph Maud (London: J. M. Dent & Sons, 1988) p. 171.
4. *Ibid.*, p.171.
5. *Ibid.*, p. 171.
6. *Ibid.*, p. 171.
7. *Ibid.*, p. 172.
8. *Ibid.*, p. 172.
9. *Ibid.*, p. 172.
10. Dylan Thomas, “Poem in October”, p. 177.

太田直也「帰郷する詩人—ディラン・トマスはなぜウェールズに帰ったのか—」

### 編集後記 Ôl-nodyn Golygyddol

「日本カムリ研究」*Bwletin y Gymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan* 第8巻第1号をお届けいたします。本号には2011年12月10日(土)に大阪市立いきいきエイジングセンター 第2研修室にて行われました「第14回例会」でご発表された方より、その「要旨」をご投稿いただきました。ご多忙の中、ご投稿いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。お陰をもちまして、ウェールズに関わる幅広い発表の場、意見交換の場となりました。

今後とも会員の皆様のお力添えを賜りますよう、よろしく願いいたします。

編集担当幹事 幸田 美沙

日本カムリ研究 第8巻 第1号 ¥500.- (送料別)  
2012年5月31日 印刷 編集担当幹事 幸田美沙  
2012年5月31日 発行 発行所 日本カムリ学会  
〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1  
大東文化大学文学部英米文学科小池剛研究室内

*Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan*  
Cyfrol 8: Rhif 1, y 31ain o Fai, 2012  
Golygydd: Misa Kohda  
Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan  
t/o Takeshi Koike, 9-1, 1-chome Takashimadaira, Itabashi-ku,  
Tokyo, Japan, 175-8571  
Cyfadran Llenyddiaeth, Adran Llenyddiaeth Saesneg ac Amerig  
Prifysgol Daito Bunka  
(Department of English and American Literature, Daito Bunka University)